

[第14回学術集会シンポジウム]

## 公衆衛生看護における家族支援

つがる市役所

佐々木瑞穂

今回のシンポジウムのテーマにあるキーワード「家族」「公衆衛生」から頭に浮かび上ったのが、「家族看護学研究」13巻2号に挙げた3事例である。これらの事例を支援した過程から、公衆衛生看護分野の「家族看護の特性」について考えてみたい。

【血糖値が高く、数年間健康診査の度に「要指導」と判定された糖尿病予備軍の壮年期男性】

男性への個別支援では血糖値が改善せず、妻や母親に「自分の健康法」と「夫（息子）の生活を見てどう思うか」を確認した。男性は「高血圧予防のため」にリンゴジュースを毎日1升飲み、妻は「アルコールから胃を守るため」に料理に野菜やチーズやバターを多用していた。家族会議を実施し、それぞれに応じた健康づくり事業への参加を促した。現在は、体重が減少し空腹時血糖も低下した。また、妻は食生活改善推進員となり活動している。

【嫁姑関係が円滑でなく、「眠れない」と数年間訴え続ける80歳代の高齢者】

うつ病スクリーニングテストで高得点となる。数年にわたり高齢者本人・嫁の双方から愚痴が聞かされており、その内容から家庭での役割がなく、生きがいがだった草取りも止められているとのことだった。関係が良好である孫の嫁を通じ、草取りに出られるよう嫁を説得してもらうよう助言した。嫁は部屋が隣という利点を活かし、姑の夜間のトイレへ行く回数を確認を依頼した。現在は、草取りに励み、「毎日忙しくて大変」「眠れない」と言いつつ、夜間のトイレ回数が減少し、うつ病スクリーニングの点数の減少がみられた。

【精神的に不安定な嫁と姑】

姑の強力なサポートがあったため、嫁の精神的な

安定を中心に支援していた。その状態が約2年経過し、姑は子育てや嫁への対応に心身ともに疲弊し、嫁不在時の家庭訪問を希望した。その後、姑や夫に対しても個別対応を開始した。現在息子夫婦と子どもは転出したが、姑は「ひきこもり家族教室」へ参加し、再び援助を求めてくるときに備え関係機関への手配を完了させた。

公衆衛生看護の支援では、対象家族との付き合いが長期間に及ぶことは珍しくなく、結果が出るのにも数ヶ月や数年を要することが多い。個人や家族にはそれぞれの歴史や生活の積み重ねがあり、支援者が考える対策が正しいとは限らない。支援を必要と感ぜないこともある。その中で重要なのは、「家庭に入っていける」「家族を長い経過の中で知る」ことである。何かあってもなくても保健師はある距離を保ちつつ近づき、保健師とは何者であるか知ってもらうことが「予防」という視点で家族を支援することの基本となる。どう家族と向き合い、どのような支援を望んでいるか、失敗も成功も家族と共に経験して学びとり、次の支援に繋げる。そのためにも、積極的に声掛けをする、対象者の声や気持ちに寄り添い、目の前の住民に関心をもつことを心がけている。家族には、想像もつかない謎と秘密と悩みが結構ある。

保健師として10年が経過した。乳児訪問した児が小学生になり親子で「健康教室」に参加している。愛煙家が家族ぐるみで禁煙に挑戦し、それがご近所に連鎖していく、住民から「眠くならない話ができるようになった」等言われる。保健師も住民もお互いに信頼し合い、楽しく健康づくりを進めていけることが理想である。以上のことが、私の考える「家族と育ちあう家族看護」であり、家族支援の醍醐味